



来館者 10 万人を達成しました！

2025 年 5 月 16 日（金）に、2010 年開館時からの来館者数が 10 万人に達しました。10 万人目のお客様は、校外学習で訪れた本郷学園高等学校の生徒さんでした。写真は山田朗館長とお祝いに駆けつけてくれた明治大学公式キャラクター「めいじろう」です。昨



は山田朗館長とお祝いに駆けつけてくれた明治大学公式キャラクター「めいじろう」です。昨



は大盛況の企画展解説会の様子です。（武田記）

年 11 月から開催していた第 15 回企画展「風船爆弾と本土決戦準備一女の子たちの戦争一」が各所で話題となり、例年より多くの方に来館いただき、予想より早い 10 万人達成となりました。呑気に構えていた職員一同にとって嬉しい誤算となりました。写真

11 月 26 日～2026 年 5 月 30 日

第 16 回
企画展

「その時、わたしたちは戦うことを命じられた一登戸研究所と本土決戦体制一」開催！



2025 年は終戦 80 年にあたります。80 年前、風船爆弾作戦を終えた登戸研究所は本土決戦に備えるため長野県を中心にした地域に分散・疎開をします。今回の企画展では、（１）本土決戦体制下の登戸研究所の活動を解明し、研

究所のどのセクションが本土決戦のために選ばれて移転したのか、（２）移転後にどこで、どのような兵器・資材の開発を重点的に進めたのかを登戸研究所の将校の日記などから明らかにします。そして、（３）大本営陸軍部が作成した戦闘マニュアルである「国民抗戦必携」を基に、日本陸軍が構想していた老若男女を問わず国民義勇戦闘隊に編成してゲリラ戦を展開していこ



登戸研究所の将校だった大月陸雄の 1945 年の日記

うとする本土決戦計画も紹介し、国民が戦うことを命じられた時のことを考えていきます。また、（４）終戦時に出された命令「特殊研究処理要領」によって、何よりも先に登戸研究所の存在が消されようとしたことや、命令に基き徹底した証拠隠滅が行われたことを明らかにします。以上を通じ本展で登戸研究所を通して 80 年前の本土決戦（準備）というものの実態に触れていただきたいと思います。関連イベントは 4 頁目にご案内していますのでぜひご参加さい。（山田記）

登戸研究所資料館には、今年度から2名の明治大学在学生在がボランティアとして活動してくれています。今は主に来館者の案内や、各展示室の簡易ガイドをしてもらっています。すでに出会われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これからは資料館職員にはない目線からの提案や、登戸研究所や資料館についての発信を期待しています！彼らがどのような気持ちで活動してくれているのか気になって、まずは今回「登戸研究所資料館でボランティア活動をするということ」というテーマでエッセイを書いてもらいました。

私が登戸研究所資料館でボランティア活動を始めたきっかけは、学芸員資格を少しでも活かせればという思いからでした。正直なところ、私は歴史に詳しいわけではありません。大学の学部時代は理系の勉強に没頭しており、歴史といえば教科書で学んだ程度。しかし、生田キャンパスに通っていた頃からキャンパス内に資料館があることは知っており、その存在がずっと気になっていました。

登戸研究所は、かつて戦争中の「秘密戦」に関わる研究を行っていた場所です。偽札の製造や風船爆弾、諜報用具の開発など、映画や小説のような題材ですが、ここではそれが現実だったことを伝えています。理系の研究や技術が、人々の生活を豊かにするだけでなく、戦争の道具にもなり得る。この事実に向き合うことは、理数系を学ぶ人にとっても決して無関係ではありません。私自身、歴史の専門家ではありませんが、展示の案内や資料整理を通して、過去の出来事を学び直す機会を得ました。そして、その学びは単なる知識の蓄積ではなく、「平和とは何か」を考える時間でもあります。戦争の記録は、ただ暗い過去としてしまうのではなく、未来に向けた警鐘として残されるべきだと強く思います。

もし生田キャンパスで学ぶ理系の学生が、この資料館を訪れたなら、自分の専門分野と歴史の接点に気づくかもしれません。そして、その気づきが、技術や研究を平和のために使うという意識につながるはずです。登戸研究所資料館は、過去を学び、未来を考える場所です。ぜひ一度足を運んでいただき、展示室の静かな空気の中で、自分にとっての平和を見つめ直す場になれば嬉しいです。

(齋藤翼)



私は戦争を経験した祖父の影響で戦争史に関心を抱き、大学入学直後から山田教授が開講する「登戸研究所から考える戦争と平和」を受講してきました。その講義の中で資料館ボランティア募集の案内を知り、4月中旬より学生ガイドとして活動を続けています。

当初、登戸研究所を単なる戦争遺跡の一つとして捉えていました。しかしガイドとして説明するために学びを深める中で、この研究所の歴史は私たち学生とも密接に関わっていることに気づきました。特に資料館の建物を使用していた第2科の研究内容は、私が専攻する化学を戦争へと転用したものでした。人類の発展に役立つはずの科学技術が、人を傷つける道具に変えられる——その事実は過去のものではなく、今も世界各地で繰り返されています。かつて秘密戦を研究した地で学ぶ者として、私は常に知識の使い方や学問の在り方を問い直さねばならないと感じています。

さらに日本は戦後80年を迎え、戦争を直接体験された方々は年々少なくなっています。一方、国際社会では深刻な分断と対立が生じ、「新たな戦前」とも呼ばれるほど緊張が高まっています。こうした状況の中で戦争の記憶を継承することは喫緊の課題であり、その担い手は私たち若い世代であるべきだと考えます。実際にガイド活動を行う中で、展示内容に加え、来館された戦争経験者の方から直接お話を伺うこともあります。それらの証言は登戸研究所に限らず、今となっては極めて貴重なものです。

登戸研究所資料館でのボランティア活動は、単なるガイドを超え、戦争の過ちを繰り返さないための語り部としての役割を担う営みでもあります。私はこの活動を通じて、過去を伝え、未来に平和をつなぐ責任を果たしていきたいと考えています。(河原環)



資料館の非公式看板猫ふみふみちゃん（以下㊟）が、渡辺賢二先生（以下㊠）から、四半世紀以上にわたる調査の秘話を聞くコーナーです。

- ㊟「先生、前回の続きをきかせてください。明治大学生田キャンパスで登戸研究所跡地の見学会を開催することになって、それでどうだった？」
- ㊠「たくさんの市民が集まってくれました。でも登戸研究所のことを知っている人はいませんでした。いつか誰かが参加するかもしれないと思い、何回も何回も開催しました。そうしたら5回目ぐらいの時に私たちの後ろからついてきた古老の方がいました。新聞で見学会のことを宣伝していたのでもしかしたら関係者が来てくれたのかもしれないと思い『登戸研究所にお勤めだったですか？』と聞くと『そうだよ』と答えてくれたんです。それが井上三郎さんとの出会いでした」

- ㊟「わあ…！ついに実際に働いていた方に出会ったのね！私身震いしちゃった」
- ㊠「井上さんとの出会いがなければ秘密研究所『登戸研究所』の存在が浮かび上がることはなかったと思います。井上さんは『ここで働いていたことは墓場まで持っていこうといったって解散した。でも、戦後40年も過ぎると話せないままになっていることが苦しくなった』と言うんです」
- ㊟「話せないままになっていることが苦しくなった…。そんな思いを抱えるってどんな毎日なんだろう」
- ㊠「私も『墓場までもって行けと言われていたので40年間も誰にも話さずに来た』と言っていたことに大変なショックを受けました」
(塚本記)

シリーズ Q & A

第二十二回 証拠隠滅されたものはどうなった？



1945年8月15日午前8時30分、登戸研究所は「ふ号〔風船爆弾〕、及登戸〔研究所〕関係は兵本〔兵器行政本部〕草刈中佐に要旨を伝達直に処置す」と陸軍軍事課から命令を受け、書類や機械、製造品などありとあらゆるものの証拠隠滅が行われます。中でも苦労したのが偽札の処分です。燃やしてから多摩川に流していましたが、水流が足りずに灰が堰にたまってしまい、不完全燃焼片からお札だと分かってしまうことに気が付きました。そのため、流した灰を回収し、夜中に腰越漁港付近から相模湾に流したとのこと⁽¹⁾。また、偽札製造用の印刷機や版などは燃やすことが難しかったため、現・明治大学生田キャンパスと生田中学校の間に広がっていた谷に落として埋めたという証言が残ります。このことについて航空写真で確認してみましょう。現在は三田小学校側は1966年からの宅地造成のため谷の痕跡は残っていませんが、それ以前は谷でした。右記の航空写真を見比べると、確かに囲み部分が戦後の

1947年は谷が埋められていることが確認できます。
(塚本記)

文中〔 〕内は資料館補足事項。〔注〕(1) 椎名真帆「戦後の登戸研究所の証拠隠滅作業・勤務員の復員・関連研究の活用」、『明治大学平和教育登戸研究所資料館館報』第2号(2017年)p.71所収〔参考資料〕川崎市WEBサイト：
https://www.city.kawasaki.jp/250/cmsfiles/contents/0000005/5013/29chim_eihoukoku.pdf
(2025年9月12日閲覧)



(上) 1944年陸軍撮影 (下) 1947年米軍撮影、いずれも国土地理院所蔵、No. 8921-C1-4 (上)、USA-M470-42 (下)。

資料館ニュース

■ヒマラヤ杉の「メモリアルコーナー」が完成



2025年3月、ヒマラヤ杉並木跡地に竣工した新校舎「センターフォレスト」1階に、メモリアルコーナーが

新設されました。登戸研究所がここに来る以前から、ヒマラヤ杉が見つめてきたこの地の歴史を紹介する展示パネルのほか、ヒマラヤ杉と登戸研究所本館の模型、そして伐採されたヒマラヤ杉から制作されたスツールやテーブルをご覧ください。

■「駒ヶ根市登戸研究所平和資料館」への訪問

6月に今年度企画展の調査も兼ね、登戸研究所の疎開先の一つである長野県駒ヶ根市に2024年秋に開館

した「駒ヶ根市登戸研究所平和資料館」を訪問しました。登戸研究所調査研究会の小木曾伸一代表、伊藤一幸共同代表および松久芳樹事務局長より展示や同会の最新の調査内容についても説明いただき、疎開先の実態が浮かび上がりました。12月開催の企画展講演会には調査会世話人の井上直人氏を講師としてお迎えし、本土決戦に向けた爆弾製造に使われたのでは、とされる伊那谷で掘られた「白土」のお話などをしてい



駒ヶ根市登戸研究所平和資料館で資料を調査する渡辺賢二・展示専門委員

ただく予定です。貴重な機会ですのでぜひご参加ください！参加方法は下記の「資料館からのお知らせ」をご覧ください。（武田記）

資料館からのご案内

■ リバティアカデミー オープン講座 / 企画展講演会

「1945年：本土決戦体制の下での登戸研究所」

日時：2025年12月6日（土）13:00～15:30

※開場 12:30

会場：明治大学生田キャンパス中央校舎6階メディアホールおよびオンライン（Zoomウェビナー）

講師：井上直人（信州大学名誉教授、登戸研究所調査研究会世話人）

ナビゲーター：館長 山田朗（明治大学平和教育登戸研究所資料館館長、明治大学文学部教授）

定員：【会場】270名、【オンライン】400名

※いずれも要事前予約

参加申し込み方法：右記URLまたは二次元コードより申し込み。

申し込み締切：12月5日（金）AM10:00

会場申込
二次元
コード



オンライン
申込
二次元コード



会場 <https://academy.meiji.jp/course/detail/7637>

オンライン <https://academy.meiji.jp/course/detail/7636>

■ 企画展展示解説会 解説者：館長 山田朗

日時：2025年12/20※、2026年1/10、1/31※、2/28、3/21、4/25、5/16 ※12/20は14時、1/31は13時開始

参加申し込み方法：希望日・参加人数・代表者氏名・連絡先を添えて電話またはメールより申し込み。

編集・発行：明治大学平和教育登戸研究所資料館

発行日：2025年9月25日

〒214-8571 神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1

明治大学生田キャンパス

TEL/FAX：044-934-7993 ✉ noborito@mics.meiji.ac.jp

Webサイト <http://www.meiji.ac.jp/noborito/index.html>

Twitter @meiji_noborito

facebook <https://www.facebook.com/people/>

明治大学平和教育登戸研究所資料館 /100077822204861/

Instagram @meiji_noborito

2025年9月13日現在の累計来館者数は104,200名です